取扱ハレテ居ル現狀ニアル。本種1種類ヲモツテ *Tarachia* 全體ニツイテ云々スルハ全ク早計デハアルガ本種ニツイテ云フナラバ原葉體ハ 1）翼縁ノ細胞ハ側方ニ突出スルコトナク縁ハ平滑デアルコト、2）假根ハ中褥ノ下部以下ニ翼部ニマデ擴ツテ生ズルコト、3）中褥ハ下部ノ比較的上方ヨリ發達スル傾向ガアルコト、4）藏卵器ノ頸部ハ細長クナル傾向ガアリ又頸細胞ノ最下位ノモノハ特ニ大形ニシテ頸部ノ座ヲナスコト、5）藏精器ハ中褥ノ下端以下ニ生ジ藏卵器ト混生スルコトガナイ等ノ諸點ニ於テ前記ノ如キ *Asplenium* ノ諸種類ト共通デアル。然シソノ内ノ *Asplenium* ノ基準形デアルちやせんしだヤとらのをしだト比較スルニ 1）翼細胞ノ分裂列ハ不明瞭デアルコト、2）翼縁及ビ兩面ニハ乳頭狀突起ヲ散生スルコト、3）中褥ハ大形ニシテ顯著ニ發達シ腎臟形ヲナスコト、4）藏卵器ハ大體ニ於テ中褥ノ中央部ヲ中心トシテ生ズルコト、5）藏精器ノ形狀・構造・大サ等ニ於テ著シキ相異ヲ示シ同群トシテ取扱フコトハ不可デアル。ひのきしだハ *Asplenium* トシテハ前述ノ如ク特殊ナ存在デアルガ翼縁及ビ生長點附近ニ乳頭狀突起ヲ有スルコト及ビ分裂列ハ不明瞭デアルコト等ノ點ニ於テ本種ニ近ク、又藏卵器ノ分布ニ於テモ相通ズルモノデアル。然シ他ノ諸點ニ於テハちやせんしだヤとらのをしだト同様ソノ趣キヲ異ニシ同列ニ論ズルコトハ出來ナイ。以上カラ本種ヲ *Asplenium* ト別屬トシテ取扱フコトハ原葉體ノ上カラモ理由アルコトデアル。（此項未完）

雜　錄　Miscellaneous

○滿洲産「木通」ノ原植物採集記　（東　丈夫）

Jôbu HIGASHI: *Aristolochia manshuriensis* KOMAROV

日本産木通ハあけび *Akebia quinata* DECNE. デアリ支那産木通ハ *Clematis* 屬ノモノトサレテキルガ、滿洲産「木通」ノ原植物ハ或人ハ *Dilleniaceae* ノみやまたたび *Actinidia Kolomikta* MAXIMOWICZ デアラウト言ヒ又或人ハまんしうまのすずくさデアルト言ツテキル。

木通ハ滿洲デハ年7萬斤以上モ産シ、殊ニ金川・濛江・柳河方面、敦化・樺甸方面、通化・輯安・撫松方面ヨリ澤山産出シテキル爲是非コノ原植物採集ノ必要ナルヲ思ヒ、梅輯線ノ老嶺・石湖附近ニ自生シテキルダラウト想像シテ8月26日ニ奉天ヲ出發シタ。

奉吉線ハ夢ノ間ニ過ギテ梅河口デ夜ガ明ケタ。8月トハ言ヘ早朝ハ寒クテガタガタトフルヘル程デアル。1時間ノ待合セデ午前6時ニ梅河口ヲ出發。梅河口、柳家間ニハがま、をみなへし、ききやう、めはじき等ガ多ク、柳家、駝腰嶺間ニハやつしろさう、さじおもだか、

われもかう、こばなわれもかう等ガ多イ。

午前9時前ニハ三源浦ニ着ク。三源浦ハ松花江水脈ト鴨綠江水脈トノ分水嶺ヲナス龍崗山嶺中ニアル町デ、カツテハ藥用人蔘ノ出廻リ地トシテ賑ツタ所デアル。

通溝、干溝間ニハ ほほづき、ゐ等ガ多ク、ユルユル走ル汽車ニ搖レナガラ通化ニ着イタノガ27日ノ10時過デアル。通化ハ東邊道第一ノ都會デ通化省ニ於ケル政治・經濟・文化ノ中心地デ、水ト山ニ挾マレタ帶ノ樣ナ高原ノ街デアリ藥草ノ集散地デアル。

第1圖　きはだ (15. 8. 29. 老嶺ニテ)

28日ノ早朝通化ヲ出發。をみなへし、やつしろさう、めはじき、さじおもだか、おほけたで、のぎく、きすげ、はぎ、まんしうぐるみ、もうこなら、たうまつむしさう、ゐ、いはやつで等ガ多ク又雪ノ降ツタ樣ニ眞白ク花ノ咲イタそば畑ガアチラコチラニ見エル。8時半頃ニハ石炭ノ寶庫ト言ハレル鐵廠ヲ通過スル。

梅輯線ハ山岳地帶ヲ縱走シテキル爲列車ハ山峽ヲ縫ヒ、溪谷ヲ橫切リ斷崖ニ沿ヒ、車窓風景ハ實ニ變化ノ美ニ富ンデキル。

第2圖　てうせんごみし (15. 8. 28. 老嶺ニテ)

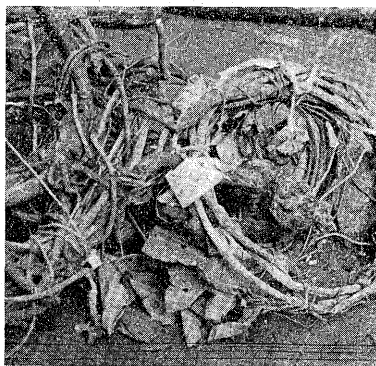
晝前ニ老嶺驛ニ着ク。驛構內ノ花畑ニハ とくさ ガ植エテアル、コノ近所ニ自生シテキルモノト思ハレル。驛ノ近クニハキレイナ溪流ガアル。ソコデ飯盒ニ火ヲツケル、コノ附近ニハ興安嶺ヤ白頭山麓ノ樣ニ白樺ガナイノデ仲々思フ樣ニ燃エナイ。フト上ヲ見ルト大キナきはだノ樹ガアリ、ソノソバニハ眞赤ナ實ヲ房々トブラサゲタてうせんごみしガ目ニ止ツタノデ早速寫眞ニトル。

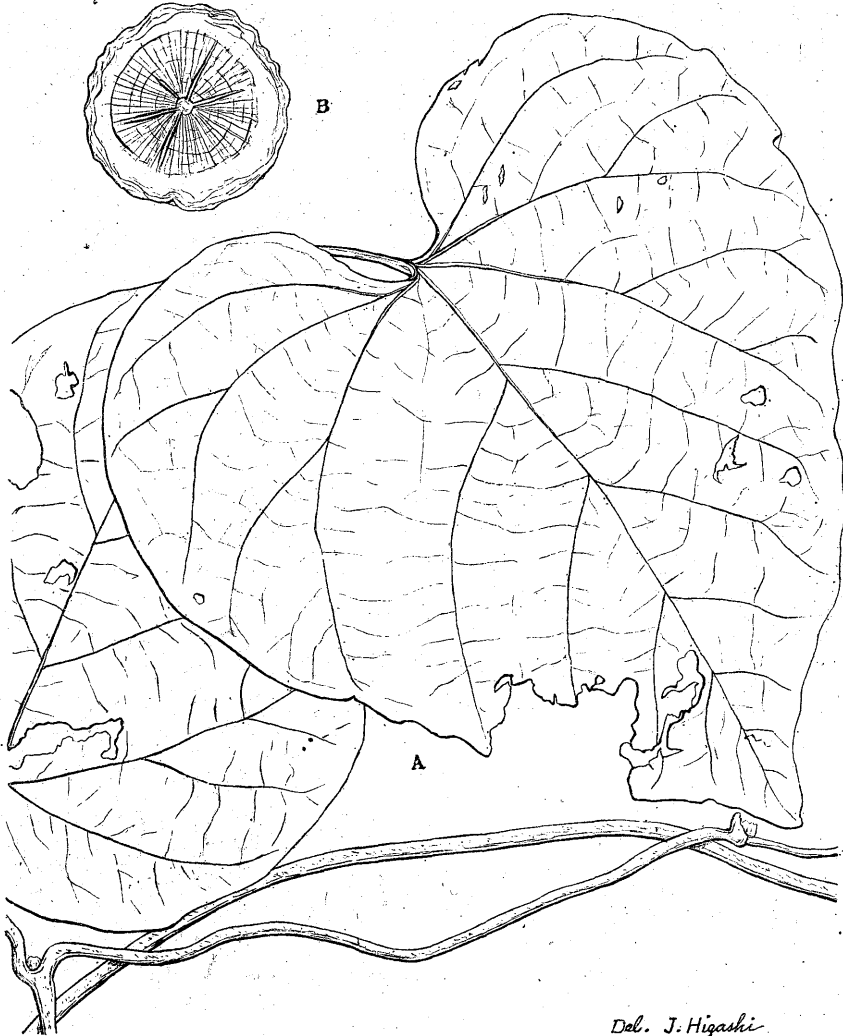
第3圖　木通ノ自生セル所、中央ノ葉ノ大キイノガ木通、向ツテ右ヨリ筆者、苦力、定君、苦力
（15. 8. 29. 石湖奥地ニテ）

第4圖　木通
向ツテ右ハ莖ノヤヤ太キモノ
（直徑 3.5 cm アリ）

老嶺ノ部落ハ驛カラ少シ離レタ所ニアツテ家ノ數モ僅 30-40 戸位シカナイ。勿論皆滿人バカリデ部落ノ周圍ハ匪賊ノ襲撃ニ備ヘル爲ニ猫ノ子モ逃サヌ樣ニ嚴重ニ大キナ木デ垣ヲ作ツテ居リ、眞中ニ門ガアリ、ソコニハ古ボケタ滿洲服ヲ着テ鐵砲ヲサゲ、彈丸ヲ麻布ニ挾ンデ肩ニカケタ番兵ガ不氣味ニ見張リヲシテキル。同行ノ定君ト 2 人デ奥地ヘハイル道ヲ尋ネル爲不案ナ思デソノ部落ヲ訪レタ。ドウモ怪シイ奴ガ來タト思ツタカ番兵ハススボケタ顏ノ中カラ目ヲギヨロギヨロト光ラシテ我々ノ行動ヲ見守ツテキル。落付イテ近ヅキ大キナ聲デ來意ヲ滿語デ告ゲルト急ニ鐵砲ガ動キハジメタ。驚イテヨク見ルト我々ニ敬禮ヲシテクレテキルノデアツタ。ホツトシテ之ニ答禮シ部落ノ中ヘハイツタ。部落ノ子供達ハ珍シサウニアチラノ軒カラモコチラノ軒カラモ飛出シテ來ル。

第5圖　採集シタ木通

老嶺カラハ一寸奥ヘハイリニクイ事ガ分ツタノデ仕方ナク午後 3 時前ノ列車デ石湖ヘ逆モドリスル事ニシタ。

石湖ハ四圍ガ重疊タル山岳ニ取圍マレタ部落デ抗木ノ出荷ガ盛ンナ所デアル。ココニハ宿屋ト言フベキ程ノモノハナイガ朝鮮宿ガアルト言フノデ、ソコヘ行ク事ニシテ驛ヲ出タ

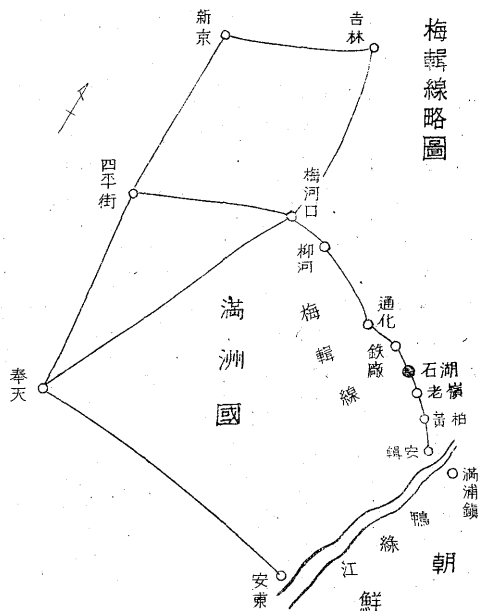
ガ途中幸ニ日本人ノ少シキル伐採組合ガアツタノデ、ソコデ色々話ヲ伺フツモリデ訪ネタ所ガドウシテモ事務所ニ泊レト親切ニススメテクレタカラ、今日ハモウ仕事モ出來ナイシ伐採組合デ御厄介ニナル事ニシタ。電燈ナドハ勿論ナイ。暗イランプノ下デ明日ノ行程ヲ考ヘ乍ラ休ム。夜中ニ雨トナツタノデ心配シタガ翌29日ハ曇ノ程度ナノデ早朝石湖ヲ立チ、

第 6 圖　木通ノ寫生圖　A ハ葉（×1/3）Bハ莖ノ横斷面（×1/2）

途中ノ變化ニ富ンダ景色ニ 心ヲ奪ハレナガラ奥地ヘ向ツタ。1時間モ歩イタ頃空ガ急ニ暗クナツタカト思フト風ノ様ニ驟雨ガ襲ツテ來タ。昨夜ノ雨デ道ハドロドロデ、マルデ泥靴デモハイタ様ニナツテ重イ。コノ邊ニハ てうせんごみし、めはじき、とりかぶと、つりがねにんじん、やぶじらみ、ひかげつるにんじん、やなぎらん等ガ多イ。

5里近ク歩イタ頃橋ノナイ川ニブツカツタ。ソノ時、折ヨク通リカカツタ車輪ノ大キイ荷馬車ニ飛ビノリ川底ノ石コロデヒドクユラレナガラ渡ル。

コノ邊ハ相當ニ木モ繁ツテキル。此處カラ山ノ中ヘ 1里半バカリハイリ更ニ谷ニ沿ツテ登ル。道等ハナク、水ガチヨロチヨロ流レテ居リソコヲ登ルノダカラタマラナイ。幾度モ尻モチヲツキナガラ頂上ニ近イ所マデタドリツイタ。密林ニナツテキルノデ晝尙暗イ所デアル。靜寂ノ中ニ水ノ流レル音ダケガ聞エ甚ダ心細イ。

途中ニハ紫色ノ花ヲ一杯ツケタはなかづらガアチラコチラニアツテ實ニ壯觀デアル。又黄色ノほそばえぼしさうノ類モ澤山アル。モウコレ以上ハ登レナイノデコノ邊デ目的ノ木通ヲサガシニカカツタ。

目ヲギヨロギヨロサシテキルト大木ニ蛇ノ様ニマキツイタ、大キナ幅ガ 25 cm、長サガ 20 cm 以上モアル様ナ廣圓形心臟底ノ葉ヲシタかづらノ様ナモノヲ見ツケタノデ、シメタトバカリ近ヅイテ見ルトコレコソサガシ求メテキタ木通デアツタ。疲レモ忘レテ思ハズ喜ビノ聲ヲアゲタ。丁度午後1時デアツタ。附近ニハをしだモ繁ツテキル。急ニ元氣ヲ得テ、日ガ暮レテハ大變ト根コソギ掘ツタ木通ヲ人夫ニカツガシテ歸路ヲ急イダ。途中カラ日モトツプリ暮レテシマヒ、石湖ニタドリツイタ時ハモウ眞暗デアツタ。晝食モトツテナイノデソノ夜ハ小サナキタナイ支那料理店ニ飛ビ込ミ、荷物ヲ持ツテクレタ苦力ヲ相手ニ片言ノ滿語デ愉快ニ老酒ヲ飲ンダ。

第7圖 梅輯線略圖

30日ノ朝8時ニ朝鮮ノ滿浦鎭行ノ列車ニ乘ル。再ビ老嶺ヲ過ギ、不思議ニモきはだノ漢藥名ト同ジ黄柏ト言フ驛ヲ過ギ、安東カラ鴨綠江ヲ溯ル事 約 80 里ノ地點ニアル輯安ヲ通過スル。輯安縣城ハ約 1700 年前ニハ高勾麗ノ古都トシテ知ラレテキル靜カナ街デアル。午前 11 時頃輯安ト鴨綠江ヲ隔テテ相對シダ朝鮮ノ滿浦鎭ニ着イタ。

税關檢査ヲ受ケ、純粹ノ朝鮮旅館デ辛イ朝鮮料理ニソノ夜ハユツクリト半島情緒ヲ味ツタガ南京蟲ノ攻擊ニハ少シ弱ツタ。豫定ノ日數ヨリモ1日遲レタノデ、31日ニハ國境ノ町ニ別レヲ告ゲ四平街行ノ列車ニ乘ル。

奉天ニ歸ツテ早速、市販ノ木通ト採集品トヲ比較剖見シタ所、皮部ニハ著明ナ纖維束ガアル事、脈管ノ狀態、簇晶及ビ砂狀ノ小單晶ガアル事、少量ノ澱粉粒ガアル事等全ク一致シテキル。

以上梅輯線ノ採集ニヨリ利尿藥トシテ用ヒラレル滿洲產「木通」ノ原植物ハ*Aristolochiaceae* ノ きだちうまのすずくさ *Aristolochia manshuriensis* KOMAROV デアル事ガ確定出來タ。

終リニ臨ミ始終御示教ヲ賜ル朝比奈泰彥先生、藤田直市先生、山下泰藏先生並ニ御鑑定ヲ賜ツタ北川政夫先生又同行シテ下サツタ定滿富君ニ感謝ノ意ヲ表シマス。

○もくれいしノ一群 (中井猛之進)

T. NAKAI: Japanese species of the genus *Microtropis* WALLICH.

もくれいしガ新屬トサレタノハ明治42(1906)年デアル(植物學雜誌第23卷第62頁參照)。次デ明治44(1911)年ニハ3年ニ一回ノ割合デ出版サレタ大日本植物誌第4輯ニ牧野博士ガ最モ美事ニ最モ精密ニ他人ノ到底眞似ノ出來ナイ程精巧ニ圖解ヲサレタ。其後同屬ト見ルベキモノニ大正2(1913)年ニハ早田文藏氏ハ臺灣植物デ *Cassine illicifolia* ト *Cassine kotoensis* トヲ書キ、大正9(1920)年ニハ又臺灣植物デ *Cassine Matsudai* (異名 *Otherodendron Matsudai* ヲ添フ)ヲ書イタ。次デ予ハ大正11(1922)年ニ琉球植物デ *Otherodendron liukiuense* ヲ書イタ。之ニ先チ明治44(1911)年ニ HANS HALLIER 氏ハ Mededeelingen van 's Rijks Herbarium (國立臘葉館報告)ノ1910年度號ノ第1號デもくれいしヲ *Microtropis* 屬ニ編入シテ *Microtropis japonica* HALLIER fil. トシテシマツタ。其ハ Ueber Phanerogamen von unsicherer oder unrichtiger Stellung (不確實又ハ不當ノ位置ニアル顯花植物)ト題シタ論文デアツテ其第33頁ニ

94) *Otherodendrum japonicum* MAKINO in Bot. Mag. Tokyo XXIII (1909), p. 62–65, fig. 1–25 hat alle wesentlichen Merkmale von *Microtropis* Wall. und demnach als **Microtropis japonica** m. in diese Gattung einzutreten.

(もくれいしハ WALLICH氏ノ *Microtropis* 屬ノ凡テ其實體通リノ特徵ヲ有スル故 *Microtropis japonica* トシテ其屬ニ入ル)

トアル。此意見ニ從ツテ當時もくれいしト東印度ニアル *Microtropis* 屬植物デ WIGHT氏ガ Icones Plantarum Indiæ Orientalis 第3卷第975–979圖ニ圖解シタ種トヲ比較シテ見タ處、もくれいしデハ花盤ガ特別ニヨク發達シテ居リ東印度ノ *Microtropis* デハ花盤ハナイカ又ハ花托ヲ薄ク裏打チスル程度デアリ, BENTHAM, HOOKER 兩氏ノ Genera Plantarum 中ノ *Microtropis* 屬ノ記相文ニハ Discus 0 v. annularis, liber v. cum petalis connatus (花盤ナキカ又ハ輪狀、離生又ハ花瓣ト癒合ス)トアリ當時トシテハ全ク要領ヲ得